石仏・石造物調査

特集

「今しか、できない……」

「文化財としてのデータを残すため」。その一心で始まった石仏・石造物調査。しかし、石に刻まれた文字の風化とともに、その伝承も風化しつつある。調査にあたる人たちは、異口同音に「今しかできない」と言う。

「やれ、読めた」。

昭和地区の石仏・石造物の調査で、立石憲利さん（井尻野。岡山民俗学会名誉理事長）が鋭いまなざしから笑顔に戻った瞬間だ。文字の判読は、調査の重要なポイント。建立した年代や寄進者などを示す文字は、地域の歴史を知る手掛かりになるからだ。

風化が進む文字と向き合うことの連続。文字の判読には、霧吹きとブラシが欠かせない。文字に水を掛け、少量の土を付けると光の加減や見る角度によって読めるようになる。刻まれている漢字もさまざまで、梵字（ぼんじ）も交じり、文字の判読にはてこずる。「人の名前の判読は特にむずかしい。一苦労だった」と、調査員の土屋久利さん（原）は言う。

調査は住民と市の協働事業だ。調査員は、公民館の呼び掛けに集まった60歳から70歳代の地区住民と立石さん。調査員は立石さんから、文字の判読方法や大きさの測り方、写真の撮り方、記録用紙の書き方など、調査に必要な技法を学び、現地調査と後世にわたり貴重な資料となる報告書の編集作業を担当する。

文書（もんじょ）でも埋蔵文化財でもない石仏・石造物から、地域の信仰心や生活の営みなど、歴史の一端をひもとくことができる。地域を愛する人々による地道な活動が、少しずつ実を結んでいる。

記憶も文字も、風化するその前に……

後世に伝えるために……